

鈴木晋介著

『つながりのジャーティヤ ——スリランカの民族とカースト』

法藏館、2013年、6,500円＋税、398頁

梅村絢美

本書は、スリランカの中央高地一帯に飛び地状に連なる茶やゴムのプランテーション農園「エステート」に働き暮らす人びとのアイデンティティをめぐる民族誌である。こうした人びとは、かつてエステートの働き手として南インドから移り住んだ移民労働者の子孫たちであり、エステート・タミルと呼ばれる。本書では、エステート・タミルの人びとによって生きられる「民族」や「カースト」の姿かたちが、生活の場における微細なやりとりの描写から丹念に記述される。そこでは、固定的な〈括り〉を突破し新たなつながりを構築しようとする人びとの姿が生き生きと描かれる。

本書は、序章に続く9章と終章から構成される。以下に、各章の概要を紹介したうえで、著者が提示しようと試みる「単独性」という概念の本書での用いられ方について言及したい。

序章

- 第1章 エステート・タミルという人々
 - 第2章 調査地の概況——シンハラ村に囲まれたゴム園
 - 第3章 調査地の経済状況および経済的関係
 - 第4章 エステート・タミル・カースト1——括りの相
 - 第5章 エステート・タミル・カースト2——つながりの相
 - 第6章 エステート・タミル・カースト3——境遇と長屋の共同性
 - 第7章 シンハラ・カースト——村落生活における括りとなつたり
 - 第8章 民族対立状況下の二つのジャーティヤ
 - 第9章 つながりのアイデンティティと女神祭礼
- ## 終章

序章では、まず、近・現代スリランカにおいてエステート・タミルの人びとが経験した複雑な境遇が示される。植民地統治下の国勢調査においてエステート・タミルの人びと

は、先住の「スリランカ・タミル」とともに「インド・タミル」として一括りにされた。ところがスリランカ独立時には市民権を否定され事実上の無国籍状態となりながら、「スリランカ・タミル」を中心に繰り広げられたスリランカ北東部の分離独立をめぐる「シンハラ対タミル」民族紛争においては、直接の当事者でないにもかかわらず「タミル」人として一括りにされ、暴力の矛先が向けられたのである。著者によると、こうした境遇は、エステート・タミルの人びとに、自分たちがいったい「何者であるか」という問題を常に突きつけてきたのだという。

続いて、こうした境遇をふまえ、エステート・タミルの人びと自身が「わたしたち」を創るそのやり方に注目するにあたっての、本書の目的と問題意識が明らかにされる。本書が問題意識を共有するのは、『『同一性の政治学』批判』の議論である。『『同一性の政治学』批判』は、オリエンタリズム批判以降に展開されたアイデンティティ・ポリティクスの議論が孕む陥穽として、対立しあう本質主義と構成主義の根底に「共有する個々を包摂し全体を構成するカテゴリーの全体化の要請」(8: 以下、本書の引用頁は数字のみを記載する)があることを指摘した。すなわち、酒井直樹が「種的同一性」の論理[1996]、小田亮が「提喩的同一性」の論理[小田 1994]として指摘したものである。『『同一性の政治学』批判』の問題意識をふまえ、著者は、アイデンティティ・ポリティクスの陥穽から抜け出す契機として小田が注目する、誰もが一貫したアイデンティティの形成などなしに、自己を肯定的に形づくる「生活の場」への注視を促す。そして、生活の場にほのみえる、「アイデンティティ・ポリティクスとは違う仕方で、わたし、わたしたちを語りたい、創りたい」(15-16)という欲求から見えてくる、提喩的同一性の論理に拠らないアイデンティティの在り方、何者であるかの「定まりの仕方」を明らかにしようと試みる。

本書において「生活の場」とともに手がかりとされるのが、タイトルにもある「ジャーティヤ」である。ジャーティヤは、しばしば「民族」や「カースト」など文脈に応じて多様に翻訳されてきた語であるが、本書では、ジャーティヤは端的に「ひとの種類」と訳される。そして、生活の場における「ひとの種類」＝ジャーティヤのつくられ方へ着眼することで、提喩的同一性の論理に対する、そうでないアイデンティティの在り方を見出そうとする。こうした過程を経て、複数の差異をとりこみながら、「排他」ではなく「対他」的なつながりのなかで生きられるジャーティヤの世界へ接近しようというのが本書の目的である。

次に、この目的へと接近するための論理的な方法論として本書が導入する、「提喩」「隠喩」「換喩」という修辞学の用語と本書での用法が提示される。本書において、これらの用語がジャーティヤの分析に導入される際、「提喩的」は「類一種」の関係性の論理に拠る包摂的な在りよう、「隠喩的」は隣接の関係性の論理に拠っている在りよう、「換喩的」は類似の関係性に拠っている在りようを示すとされる。また、提喩的論理にもとづき圍繞・同定・表象される集団や個体は〈括り〉、換喩・隠喩的論理にもとづき形づくられる集団を〈まとまり〉、まとまりを形づくる換喩的隣接性・隠喩的類似性という関係性の具体的な諸事項を〈つながり〉という語にそれぞれ置き換えて考えることが説明される。

第1章「エステート・タミルという人々」では、スリランカ中央高地一帯にひろがるエ

ステートの地理的配置と構成の説明に続いて、エステート・タミルの人口がスリランカ全人口の4.6パーセント（約85万9千52人）であり、そのうち75パーセントが中央高地一帯のエステートに暮らしていることが示される。そのうえで、エステート・タミルの人びとが経験した「民族としての範疇化」、「市民権問題」、「シンハラ対タミル」民族対立問題といったマクロな政治状況が提示される。そしてこうした圍繞・同定が、エステート・タミルの人びとの日常のなかに、生活の脈絡を寸断する潜在的脅威としてあることが指摘される。

第2章「調査地の概況——シンハラ農村に囲まれたゴム園」では、著者がフィールドワークを行った「ヒルトップ・エステート」（仮名・以下、ヒルトップと略記）という小さなゴム園について、シンハラ村落の狭間にあって四方をシンハラ村落に囲まれているという地理的配置を明らかにしたうえで、ヒルトップの歴史とエステート経営、就業、ヒルトップの居住人口と世帯規模、カーストや宗教別分類、使用言語が提示される。また、居住労働者が暮らす集合住宅「長屋（ライン）」の構成が、長屋の部屋の割り当てはカースト区分に無関係になされ、異なるカーストの者同士が同じ長屋に暮らすことにもふれられる。第2章ではまた、ヒルトップに暮らす人びとと交流が深い、隣接するシンハラ村落「K村」（仮名）についても概観が紹介される。

第3章「調査地の経済状況および経済的関係」では、低い水準で均質的なヒルトップの経済状況とK村の村外収入に偏りがちな経済状況が世帯別の詳細なデータとともに提示され、両村の経済的連結が明らかにされる。ヒルトップ住人の厳しい経済状況は、エステート内のささやかな格差を問題とせず、「みんな貧しい、似たようなものだ」という均質的な意識をもたらすという。いっぽうK村では、多くの世帯が主収入を村落外部の経済活動に依存しており、村内で行われる水稻耕作と小規模で粗放的なワット農業（敷地内での換金作物栽培）が一時的に生み出す労働需要は、ヒルトップのエステート・タミルによってエステート労働の副業というかたちで補われる。K村住人にとり村内の日雇労働が割に合わず、他の敷地内での日雇労働を不名誉と捉える傾向があるためである。こうした状況をふまえ、第3章では、K村内に生じる日雇労働需要の隙間を、低収入のヒルトップ住人が埋めるというかたちで、両村が連結しているという構図が提示される。

第4章から続く三つの章では、形骸化した括りと化したカーストを放棄し、つながりをつたって、ひとつの巨大なエステート・タミル・カーストを生きようとする人びとの在り方が、対内的領域から検討される。第4章「エステート・タミル・カースト1——括りの相」では、先行研究が提示した階層体系図式と著者が調査を行ったヒルトップの事例とが比較検討される。そこでは、先行研究がエステート・タミル・カースト像として提示した浄・不浄観念に裏付けられる不変の階層体系図式と、この図式に投影されるカースト・ヒエラルキーの階層性とジャーティや把握の階層性というクロスした階層性の図式の解体が試みられる。ヒルトップにおいては、対ブラーマンや対シンハラといった対外的領域では何らかの序列の存在が言明されるものの、対内的領域では浄・不浄観念とそれに関連する諸実践がカースト序列から著しく乖離しており、カースト序列自体が極端に曖昧化していることから、先行研究が描くような、浄・不浄観念と提喻的同一性による包摂関係にもと

づく階層図式が成り立たないことが、ヒルトップ内における食物の授受・共食、伝統的職能、儀礼、シンハラ・カースト制度の影響等の事例から明らかにされる。

第5章「エステート・タミル・カースト2——つながりの相」では、形骸化したカーストの括りの突破口として前章で言及した「つながり」が、エステート・タミルというひとつの巨大なジャーティヤの組成を形成していることについて、「親族のつながり」「職業のつながり」から検討される。親族のつながりは、交叉イトコ婚の選好や父系継承の語りとは裏腹に、実際には「なし崩し」的にカースト横断的な親族関係が紡がれ、その現実には追認的に肯定されるという。また、職業のつながりは、生活経験の類似性に根差す隠喩的想像力にもとづいていることが明らかにされる。そして、親族のつながりと職業のつながりの双方が、換喩的・隠喩的論理に抛る実践と想像をつうじてつくられるつながりをつたって「ひとまとまり」へと向かい、エステート・タミル・カーストというひとつの巨大なカーストを形成することが示される。

第6章「エステート・タミル・カースト3——境遇と長屋の共同性」では、ヒルトップの住人を「ひとまとまり」へと向かわせる彼・彼女らが生きる境遇について、長屋で行われる成女儀礼のプロセスを追いながら報告される。そこでは、初潮のケガレ（ティートゥ）が「同じ長屋の者だけが共有する」というかたちで住民ら自身によって範囲設定されることに着目し、「まったくもって迷惑だ」と言いながらも、同じ長屋に暮らす以上、つながりを生きざるを得ない境遇、主体的でも、目的でも、意識的でもなく、共同性を生きてきた彼・彼女らの境遇が描出される。それをふまえ著者は、浄・不浄観念がカースト序列から著しく乖離し渾然とした状況が、人びと自身によって弁別されていることに着目する。ケガレの意味を、(身内の) 出産、初潮、月経、死など、カーストの階層序列にかかわらずだれもが「いっしょくた」に経験するイベントに特化（意味論的集中化）することで、世俗内的階層序列を曖昧化させると同時に、ケガレとその影響範囲である長屋の共同性というかたちでつながりを形成しているというのである。

第7章「シンハラ・カースト——村落生活における括りとつながり」では、対外的領域に視点を移し、ヒルトップ住人がもうひとつのカーストのように日常的に関係を結ぶ隣人シンハラについて、経済活動や政治的領域とカーストの関係からとらえられる〈括り〉の相と、カーストごとに期待される振る舞い（カースト作法）が、その適用範囲を超えて転用されることから見えるつながりの相から提示される。これをふまえ著者は、エンドガミーへの強固な固執があるいっぽうで、その違反への制裁として規定されたものがないことに着目する。そしてその背景として、シンハラの子族関係が「抽象的な親族集団という括り」と、一緒に暮らす等「具体的な親族関係のつながり」の二つの相から成り立っており、シンハラにおけるエンドガミー違反は、前者の問題事項とされることはなく、後者のつながりにおいて、付随する親族のつながりの部分的な切断や維持というかたちで超克されるためだと指摘する。そして、エンドガミー違反が増え続ける今日にあってエンドガミーへの固執の意味は、抽象的な括りとは無関係に（ときにそれと矛盾し、浸食するように）実践される、つながりの希求であると述べる（286）。

第8章「民族対立状況下の二つのジャーティヤ」では、エステート・タミルのひとまと

まりの組成が、生活の場におけるヒルトップ住人とK村住人との関係と、それに覆い被さるようにある「シンハラ対タミル」という民族対立状況から検討される。本章では、「ジャーティヤの違いなどあるもんか（中略）でも村の連中とエステートの連中はジャーティヤが違う」というヒルトップ住人の語りにある「違い」のもつ意味が二つの側面から慎重に吟味される。一つ目は、「村の連中／エステートの連中」が時に「シンハラ／タミル」という図式に重ねられる「排他的差異化」＝括りのジャーティヤの顕在である。この差異化は、日常生活における身体作法や振る舞い、呼びかけ言葉、祝祭時の贈り物交換や屋根修理の手間貸し、成女儀礼における洗濯カーストの参入などといった場面でも認められるという。二つ目は、序列の分断ではなく、人びとを結びつけるべき運用されるつながりの証としての「対他的差異化」である。そこでは、互いに他を前提として構成し合うひとつのつながりのジャーティヤへと質的な転換が図られるのである。つまり、序列の高低は両者間の依存という関係性を示しており、両者のつながりの文化的比喩表現・つながりの表象（315）であるという。こうして著者は「対他的差異化」のなかに、提喩的同一性の論理にもとづく排他的差異化への対抗の契機を見出そうとする。

第9章「つながりのアイデンティティと女神祭礼」では、著者がこれまで追及してきた、提喩的同一性に依拠しない、「そうでないアイデンティティ」、すなわち換喩的・隠喩的同一性にもとづくつながりが、ヒルトップ住人によって執り行われるアーリアンマン女神祭礼の事例から描出される。アーリアンマン女神は、南インドで広く崇拝される女神であるが、海を渡ったヒルトップにおいても暮らしの安寧を祈願する対象として広く信仰されている。ヒルトップにおけるアーリアンマン女神の壺取りの儀礼では、泉のほとりの祭壇に並べられた品々のうち「正解の品」をつかんだものが霊媒とされる。ここでは霊媒は、女神との直接対峙をつうじて、女神自身によって選定されるとされる。著者は、偶然が支配する霊媒の選定においてヒルトップ住人がしばしば口にする、「誰でもできる。誰でも構わない」という語りのなかに、「諸個人が形づくる平等性」を読み込むのを踏みとどまる。そして、柄谷行人が提示した「単独性」の概念を手がかりに、「もしかしたら」「誰でもありうること」という可能性の根拠を探ろうとする。すなわち、女神との直接対峙というぎりぎりの隣接・つながりを構築する単独的なひとりひとりを見出す。そしてこの壺取り儀礼のなかに、生活の場においてつながりを優先し括りを突破して生きる人びと、「代替不能の、単独的なひとりひとりの、定まりの根源的偶然性と受動性、そして可変態としてのひとの様相」の再演（362）をみるのである。

終章では、本書で提示された提喩的同一性の論理に拠らない、「つながりのアイデンティティ」の在りようを再確認したうえで、「提喩的同一性の括りの論理を拒みながらも、つながりをつたって『ひとの種類』をつくりながら生き続ける人びとにとって、ジャーティヤも、また何者であるかの定まりも、つながりの創造性に依拠しつつ絶えずその在りようを変えていく潜在性を有している。対他的つながりによる定まりの偶然性は目に見えない下地としてこの可変性、創造性を支えているはずである。」という結論が提出される。

以上、非常に大雑把ではあるが、本書の内容を紹介した。排他的差異にもとづき人びと

の分断し固定化する〈括り〉とは異なるやり方で人びとが創りあげるつながりが、緻密なフィールドデータにもとづき、生き生きと記述されている。読み進めるうち読者は、「ある種の差異はつながりの証であり、差異があるからこそ人びとがつながるのだ」という本書が発信する根深いメッセージを深く胸に刻み、読者自身の生活の場に重ねるきっかけを得ることとなるだろう。

これをふまえ、著者が本書をつうじて「彼らの生きるやり方を裏切らないため」「均質的で匿名的な『個人』へと引き込まれそうな箇所を何度となく踏みとどまってきた」

(356) 理由として導入する「単独性」について検討してみたい。第9章以降、「単独性とは代替不可能の個性性である」(359)と言いながら「特殊性とは別のある種の代替可能性のようなものが裏書きされている」(359)とか、女神と霊媒との「ぎりぎりの換喩的隣接性」(372)といった、理解に苦しむ表現が見当る。ここでは、これらの表現によって著者が伝えようとしたことについて、評者なりに考えてみたい。

すでに紹介したとおり、著者が手がかりとする単独性という概念は、柄谷行人（柄谷は、ドゥルーズとガタリが『差異と反復』提示した図式にその着想を得ている）によるものである。ところがどういうわけか、本書では、単独性は特殊性との対比において紹介されるのみで、柄谷[1989]が単独性について説明する際、「一般性—特殊性（個性性）」という軸とともに提示した「普遍性—単独性」という軸が言及されない。しかし、単独性を普遍性との対においてとらえることで、上記の表現を理解する手がかりが得られるように思われる。

そこで着目したいのが、〈つながり〉が対他的差異を内包とするというときの差異である。その差異はいったい何に由来するのだろうか。言うまでもなくここで著者が言わんとする差異は、カースト（序列）とか民族（区分）といった一般性のなかの特殊性（高／低）に由来するのではない。それは、他の誰かとの比較のなかにある差異でなく、小田亮が言う「たとえ地位や能力や容姿に違いがなくても存在するような差異」「いつでもどこでも存在する『普遍的』なものであって、それによつてはじめて他者が他者となり、私が私となるような差異」[小田 1994: 233]だと理解すべきである。

〈つながり〉が換喩隠喩的論理にもとづく「他なるもの」を前提とする(340-341)というとき（差異がなければ隠喩や換喩は成り立たない）、その「他なるもの」を、普遍的にどこにでもある差異＝単独性と理解してみてもはどうだろうか。それは代替可能では決してなく、代替不可能という意味での普遍性であり、単独性なのである。著者は単独性を関係性の中にのみ存在するということをとにかく強調するが(359-360)、対他的関係性が前提とする差異のなかに、すでに普遍性＝単独性は存在するのである。

女神祭礼の壺取り儀礼の事例分析のなかで著者は、「誰でもできる、誰でも構わない」という人びとの語りに大きな関心を寄せているが、当の人びとは、（誰でも構わないのだけれど）もしかしたら「この私」が選ばれるかもしれないという少なからぬ期待（著者は当惑して参加しなかったそうだが）があるからこそ、儀礼に参加するはずだ。だとするならば、「他でもないこの私」「この私ではなくてこいつ」が選ばれたこと、あるいは選ばれなかったことへの関心もことさら大きいはずである。そして、「他でもないこの私」に与

えられた結末を理解するための手がかりを人びとは必要としている。そこで求められるのが、「それによつてはじめて他者が他者となり、私が私となるような普遍的な差異」としての単独性だと考えられないだろうか。そうすることで、女神と霊媒との「ぎりぎりの隣接性」という無理な表現をせずとも、理解できるように思われる。

常に他を必要とし、関係性のなかで培われる単独性というとき、そこに「単独性をみるのは誰なのか」、「誰にとっての単独性なのか」、という問いに明確な答えを出すことは難しい（だから著者は、「本人の主観的意識を突き放して考えたほうがよく、いつそモノの喩がよい」（358-359）という）。だが、そこに普遍的な差異としての単独性という意味を補えば、見えてくるものがあるように思われる。

以上、僭越ながら、評者なりに著者の表現を補いながら、本書の奥行を理解しようと試みた。本書の魅力が伝われば幸いである。

<参考文献>

小田 亮 1994 『構造人類学のフィールド』（世界思想ゼミナール）世界思想社。

柄谷行人 1989 『言葉と悲劇』第三文明社。

酒井直樹 1996 『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史—地政的配置』（講談社学術文庫）講談社。